

大地

第 32 号
2009. 8. 15. 発行
浄 國 寺
上越市町3丁目14-10
☎025-523-5724

俳句十句

山崎 睦

夏の夜や月下美人の初香り

念仏の日々とは行かず夏の雨

起きぬげに見る万緑の眩しかり

稲田にも濃淡ありて真平

病院に待つ間の汗の流れおり

それぞれに蚊やりを腰に草を取る

草取りの済みて庭苔生き返る

ぐらぐらと大地を揺れて山残る

梅雨明けし高田はいまだ残り雨

ぼんやりと唯庭眺め夕端居

一枚の色紙

吉野秀雄の歌

山崎隆昌

四月初旬に三鷹の叔父の法事があり上京した。その折、久しぶりに神田の古本屋街に出掛けた。三十年振りにもなるうか。街の様子はすっかり変わり、今浦島の感。その昔一軒の店をゆっくりとのぞき、高く積まれた古本を眺め徘徊したことが記憶に懐かしい。古本さがしの目的は、吉野秀雄の歌集（絶版本）を手に入れるためである。

わたしが歌人吉野秀雄の名前を知ったのは父から一枚の色紙を渡されてから。そこには何やらむ生きているにあらで

生かされてゐるを実感す無碍光かこれの秀雄の歌が父の墨字で書かれていた。

当時のわたしは三十代、目の前の老人福祉の仕事に右往左往していた頃で、渡された歌のことなど考えようともしなかった。それから時間が随分過ぎた。

或るとき吉野秀雄著『良寛和尚の人と歌』を手取る機会があり、読み進むうち吉野秀雄の歌を今少し知りたいと思った。ところが街の本屋には無い。幸いにも檀信徒の鹿住さんから『吉野秀雄全歌集』（新潟砂丘短歌会刊）をお借りすることができて、怠けながら

も少しずつ拾い読みをしていた。読み進むうちに要らぬ欲が出て、やはり何とか自分で歌集を求めようと考えた次第である。

さすが神田古本街！目指すものは店の奥の書架に鎮座していた。『定本吉野秀雄全歌集』全三巻（弥生書房刊）である。

歌人吉野秀雄は、一九〇二年に群馬県に生まれる（両親はともに新潟県の生まれ）慶応大学を病のため中退、終生会津八一に師事、万葉の歌を求め続け、良寛の研究に没頭し、一九六七年生涯を終える。享年六十五歳。

歌集を開き歌を読んでいると、三十年前、父がわたしに吉野秀雄の歌を渡した気持ちが見えてくる気がする。その六カ月後に父は命を終えるのだが。今は素直に有り難いと思う。

ふるさとに母が称ふる念仏の

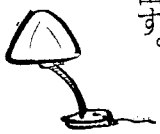
耳の底よりわれをいざなふ

うつし身の生死の大事つくづく

病めば身に知れ常忘れりて

神田古本屋街の一時間余りの古本さがしはいささか疲れたが楽しい時間だった。

本の事では、三鷹の叔父も本が好きでその話も面白かったことを思い出す。



「天からの手紙」

日本画家 柴田 長俊

私の生れた高田は、豪雪で名をはせた。

江戸時代、雪の殿様と呼ばれた古河藩主土井利位は、空から舞い降りる雪のひとひらの姿を追い求め、雪が降りそうだと予想すると、黒い漆器を冷やして家来と共に雪を待った。漆器に雪の一片を受けて観察し、書留めて

「雪華図説」を残した。その図説を鈴木牧之が自作「北越雪譜」初編上之巻に掲載し、世に出るきっかけとなった。美しい雪のかたちが記録され、この時代、浮世絵の着物の柄にも雪の模様が描かれている。

鈴木牧之は一七七〇年一月、越後塩沢の縮仲買商の家に生れた。雪国に降る雪は人も自然も生活も埋め尽くしてしまう。屋根に積もった雪は重く、すべてを包み込む。牧之は二十代で、そんな雪の中に生きる人々の生活や伝承をレポートした「雪物語」の出版を思い立つ。

しかし「北越雪譜」として第一巻が刊行された時には、それから四十年の歳月が過ぎていた。全七巻が出版されたのは七十二歳の生涯を終えた後である。「北越雪譜」は当時の大ベストセラーとなった。出版に漕ぎ着けるまでの牧之の強靱な粘りは雪国に育まれた性

格かも知れない。

十一月に入ると雲が低くなる。時雨れる日が多くなり里山は冬支度を始める。冬になると朝起きてすぐ外を見る。もし雪ならば長靴を履いて外に出る。道路までの雪かきは子どもの仕事だった。

高田には今でも雁木が残る。家々の屋根先を伸ばしてつなぎ、ひと続きの軒下を作る。

雁木は一つ屋根の連帯意識を生む。雪国の人の知恵であり、雪の中を歩く人々への優しさである。

「北越雪譜」の出版に力を貸した山東京伝、京水親子は試し摺りを塩沢に持参した折り高田を通り、雁木を見ている。「江戸の町にいふ店下を越後に雁木又庇といふ。雁木の下広くして小荷駄をも攀くべきほどなり。この雪中にこの庇下を往来の為なり」と京伝は記している。また牧之は雁木のことを俚言に「胎内潜り」または「間夫」と記している。

牧之の住む塩沢は縮の集散地であった。越後上布や縮は、苧麻という麻糸で織る。魚沼の地も二階まで雪が積もる。家全体が湿気に包まれ、乾燥に弱い麻糸にとっていい環境だ。「雪中に糸をなし、雪中に織り、雪水に洒ぎ、雪上にさらす」と「北越雪譜」にある有名な一節である。

雪上に上布を並べ雪に晒す。雪が融けるときに発生するオゾンに、漂白効果があるとい

う。深い雪の恵みである。

「北越雪譜」を触媒にして、雪のイメージを膨らませて蒼雪の叙事詩十二景を三年がかりで描いた。

日本画で「しろ」は、胡粉と呼ばれる。イタボ牡蠣を数年野積し、風化させたものを粉砕し、水で攪拌する。不純物を流し、沈殿した泥状のものを杉板に流し、天日で乾燥させる。私の絵の中で清らかな雪となる。

《柴田長俊氏》

柴田長俊氏は一九四九年上越高田の生れ現在、創画会の中心的な作家として国内外で活躍中。今秋もスイスで個展の予定映画監督の山田洋次氏は、柴田氏の作品について次のように述べている。

「妙高の絵を見ていると、柴田さんという画家がその絵を描いたというよりも、上越の美しい自然が、四季それぞれに艶やかに衣替えをする妙高山が、柴田さんに命じて描かせたのではないかと思えてくる」(『上越の人』より)

また柴田氏には、ステンドグラスの作品も多い。上越市では、城北中学校、上越観光物産センター、高田駅、川室記念病院、いなほ園等々、手吹きガラスの大画面の中で光が躍動し、見る者を圧倒する。

傘がない

山崎慎子

今年はやたら雨がが多い。

八月に入っても梅雨が明けないのでから、やはり異常である。

ところが、私には傘がない。正確に言えば大事にしていた傘がない。なくしたのである。

特別に思い入れがあったとか、いわく因縁があったとか、というのではなく、法事の引出物のカタログで頂いた、普通の傘である。

単純に、きれいな傘だったので、大事に大事に使っていたのだが、気が付いた時には、なくなってしまうていたのだ。

傘に限らず、六十数年の間に、忘れ物、落し物、失せ物の類いを、どの位の数してきたのだろう。失せ物を探す時間を累計すれば、結構大変な時間になるはずで、おまけに近頃では、やっと見つかったと思つたその時には次の探し物に、おたおたするといった塩梅なのだ。

そして、失せ物の中でも断然多いのが傘である。子どもの頃から今に至るまで、何本の傘を忘れて来てしまっただろう。

今は百円傘もあり、どの家にも家族の数を超える傘があるのがあたり前のようになっている。けれど私が子どもの頃は傘もまた貴重品

で、やたらに買ってもらえるようなものではなかった。やっと買ってもらった傘を、ボンヤリ娘の私は、懲りることなく、よく置き忘れをし、置き去りにされた傘は、そのまま誰かのものになってしまった。

右から左、すぐに買って貰えるはずもなくひたすら雨の降らないことを祈り、次の傘を与えてもらうまで、弟の傘に入って小さい傘に肩を寄せ合つて通学したのである。

ところで、好きな歌手の一人に井上陽水がいる。独特の歌詞とメロディー、そしてかなりの高音で歌い上げる。

その陽水の歌のひとつに、その名も「傘がない」というのがある。三十七年前の作品である。

都会では自殺する若者が増えている

今朝来た新聞の片隅に書いていた

だけでも問題は今日の雨 傘がない

(中略)

テレビでは我が国の将来の問題を

誰かが深刻な顔をしてしゃべってる

だけでも問題は今日の雨 傘がない

(後略)

自殺する人は今や年間三万人を、ゆうに超えてしまい、この国の将来は更に深刻なことになっている。

そんなことより、傘がないことのほうが—とは言えないけれど、梅雨明け宣言から十日。未だに夏空は見えず雨催いの日が続いている。今、私には傘がない。

菊なげ入れよ棺の中

山崎隆昌

夏目漱石に、次の句がある。

あるほどの菊なげ入れよ棺の中

漱石が誰の死に立ち会い詠んだものか判らないが、そこに深い悲しみが伝わってくる。

時代は明治、葬儀屋など存在せず、現代のようにあらかじめ用意された花を入れるものとは違い、野に咲く野菊、庭に咲く庭菊など「すべて棺の中になげ入れよ」とする。

映画「おくりびと」が話題になった。映像が美しく、俳優の所作も見事であった。

現在、葬儀が葬儀屋の手に委ねられ、私たちが死への立ち会いが希薄になったように思える。そこでは死者への思いや感謝などは語られるけれど、自らの深い悲しみ、命への不思議や生死について語られることは少ない。このことは、同時に寺(私)と葬儀の関係の問題でもあるのだ。

葬儀(死)は命への大切な縁でありたい。

土筆の思い出

横浜市 風間義平



大地三十一号に山崎慎子様の書かれた「ハ
イジ姉さん」の記事を読んで、私の幼き日の
ことが浮かんで来ました。

私が小学校高学年の頃（確か五年生の頃）
高田の我が家の茶の間に和歌一首を書いた一
枚の色紙が丸額に入れて壁に掛けていた。歌
の題は「土筆」そしてその内容は

つく土筆生きむ願ひのひとすじに

大地を割りて伸び出にけり

とあった。

当時の私は「土筆」が川原の土堤に生える
あの「つくし」とは知らず、従ってその歌の
意味が判らずにいたが、或る日母に聞いて見
た。火鉢の灰を火箸で馴らし乍ら「土筆」と
は春になると土堤に生える「つくし」のこと
だよ。この色紙は寺町の浄国寺のお寺さんに
書いていただいたもので、毎年春になると川
原の土堤の土の下から「つくし」の芽が勢い
よく出てくる様子を詠まれたもので、人間も
あの土筆の様にこの世の中を力強く生きて行っ
てほしいと云うことだよ、と教えてくれた。

その時の優しい母の面影が浮かんでくる。
そして、土筆の生えた青田川の土堤に友人

と二人で腰を降ろし、川面に釣り糸を垂れた
六十五年前の少年時代をなつかしく思い出し
ています。

犬と共に暮らす

山崎隆昌



今日も我が家では蓮華の大運動会。蓮華は
二匹の犬のこと、犬種はパグ。蓮（れん）九
歳、華（はな）二歳である。パグ犬の前は、
盲導犬をリタイアした利口な黒ラブ犬が同居
者であった。十年前に十六歳で静かに息を引
き取り、今は裏庭に眠る。

残された人間達は、犬との同居生活が忘れ
難く、家族会議の結果また犬を飼うことを決
定した。今度は成長の時間を共にしたい考え
て子犬から育てることにしたのだが、さて犬
種をどうするか。なかなか決まらない。

そんな折り、街中で初老の婦人に連れられ
散歩するパグに出会った。もの珍しさもあり
特徴あるその姿や顔を見ているうちに、パグ
と暮らすのも悪くないぞと思った。家族も満
場一致で賛成

そんなこんなで二〇〇〇年八月に生後二か
月の蓮がわが家の同居人となったのである。

パグ犬の特徴は、何よりその表情の豊かさ
にある。悲しい時、嬉しい時、不満な時、そ

れぞれに大きな目が訴え、顔の表情が変わり、
体が表現する。云うならば、優れた天性のコ
メディアン、愛嬌たっぷりの三枚目。

それからの我が家はパグ、パグ、パグで、
テレビにパグが少しでも映れば大騒ぎするほ
どの親（飼い主？）バカぶり。我ながら呆れ
る様で、端からみれば滑稽そのものである。
蓮が六歳過ぎた頃、二匹目を迎えることが
話題になった。そして迎えたのが生後二か月
の華。新入り犬は、穏やかな蓮とは対称的、
まるで牧羊犬の様である。身のこなしの軽さ、
スピード、もしパグのオリンピックがあれは
優勝確実と家族は密かに思っているのだ。
しかし、やんちゃな華もパグ犬、愛嬌豊かな
表情、行動の一つ一つが楽しい。ために、飼
い主の親バカぶりも二倍だ。彼方此方に犬害
を受けながらも共に暮らしている。

後記

集中豪雨、竜巻、冷夏、酷暑、不順な
天候と言うより異常気象です。やはり温
暖化の影響でしょうか。自然の異常化は、
人間の異常化への警鐘でありましょう。
今号は画家柴田長俊氏よりご寄稿を戴
きました。雪は美しい「天からの手紙」
風間氏からは、祖父隆英の短歌にまつ
わるお話、懐かしい思いがします。
皆様「大地」へご寄稿ください。（隆）